

2026年9月27日 教会音楽月間②

説教題『新しい歌を歌え！』詩編 98：1～9

主任牧師 加藤 誠

「新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた。右の御手、聖なる御腕によって／主は救いの御業を果たされた」(詩編98編1節)

先週の第二礼拝のユースによる会衆賛美リードでは、私たちの心の中を「天の喜びの風」がさわやかに吹き抜けるのを感じました。また午後の女性会ではソーラン節による賛美「人間を取る漁師に」が三階チャペルに弾けました。賛美に年齢は関係ないですね。そして教会の交わりの恵みを覚えました。私たちは一人だけでは信仰を保つことが難しいです。信仰の友が歌う賛美を通して霊の力を注がれ、慰められ、力づけられるのです。また先週の説教では、旧約聖書の礼拝で使われる「神をほめたたえる、賛美する」という言葉には「主に向かって、爆発的に賛美をあらわす」という意味もあれば、「言葉なしに、静かに主の前にひれ伏す」ことも「賛美」であることを学びました。今朝の第二礼拝ではいつも奏楽奉仕をされている浅見美知子さんの証しをわけていただきましたが、礼拝の奏楽は、主の前に心を静めて、主の御心に向けて心と体を整え集中していく大切な賛美の時であることを覚えたいのです。

さて今朝は詩編 98 編から一緒に聴いていきましょう。この詩編は「新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた。」（1 節）という力強い呼びかけで始まっています。この詩編が語る「新しい歌」とはどのような歌でしょうか。約 40 年前、わたしの学生時代は「ニューミュージック」が「新しい歌」として若者たちの心を捕らえました。その前に流行していた「フォークソング」が学生運動と連動した政治的なメッセージを含んだ歌詞であったのとは対照的に、一人ひとりの小さな物語や夢、恋などが、洗練された都会的センスのメロディに託されて歌われるようになったのです。しかしその後次々に「新しい歌」が生まれ、今やかつての「ニューミュージック」は「昭和な人々の懐メロ」となりました。

それに対して、詩編 98 編は「主の驚くべき御業」をほめたたえる「新しい賛美」を語ります。私たち人間が思いも及ばない「主の新しい救いの出来事」による賛美。それが聖書の「新しい歌」です。人間の新しい感性によってクリエイティブに生み出される「新しいジャンル、タイプの歌」ではなく、主なる神の恵みが私たちに与えてくださる「驚くべき新しい歌」です。詩編 40 編はこう歌います。「主は耳を傾けて叫びを聞いてくださった。滅びの穴、泥沼からわたしを引き上げ、わたしの足を岩の上に立たせ、しっかりと歩ませ、わたしの口に新しい歌を、私たちの神への賛美を授けてくださった」。また詩編 42 編はこう歌います。「昼、主は命じて慈しみをわたしに送り、夜、主の歌がわたしと共にある」。さらに詩編 34 編はこう歌います。「味わい見よ、主の恵みの歌を。…主を畏れる人には、何も欠けることがない」。わたしを泥沼から引き上げ、立たせ、歩ませてくれる主の恵み。昼、慈しみを送り、夜、主の歌を与えてくださる主の恵み。その主の恵みを知り、味わう人には、何も欠けることがな

い。「主を畏れる」とは「わたしを神とするのではなく、神を神とする」ということ。私たちが「心の真ん中で、神を神とする」とき、私たちに主の恵みによる「新しい歌」が与えられ、私たちは主を賛美しながらこの世界を歩む者とされるのです。

主イエスは私たちの間に生きてくださり、私たちに「新しい歌」を歌って生きる幸いに招いてくださいました。特に十字架という不条理な苦難と死、悲しみと嘆きに覆われた出来事の中にも、復活の希望につながる「新しい歌」を与えてくださいました。

「新しい歌／賛美」は、私たちの心に「天窓」「底窓」「横窓」の三つの窓が開けられていく中に生まれます。天の神の愛とのつながりをいただく「天窓」。自分自身の姿を見つめ、そこに注がれている十字架の主の愛に気づかされていく「底窓」。そして共に生きる隣人と新しい関係を与えられていく「横窓」。新約聖書には、主イエスと出会い、「天窓」「底窓」「横窓」を開けられて、それまでの泥沼から引き上げられ、岩の上に立たされ、しっかりと歩むようにされた人たちの「新しい賛美」がたくさん紹介されています。

救い主の赤ん坊が馬小屋の飼い葉桶の中に生まれた時、野原の羊飼いたちは天使のお告げのとおりだったことを喜び、賛美を歌いながら、町の人びとに救いの出来事を語りました。それまでは律法をきちんと守る人たちが「光の子」と呼ばれ、野原の羊飼いたちは律法を守れない「闇の子」と呼ばれたわけですが、天の救いの光はその羊飼いたちを照らす光として輝き、彼らの心に「天窓」が開けられたのでした。また漁師のペトロは、自分の想像をはるかに超えた主イエスの恵みを目の当たりにして「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と自分の「底窓」を開けられたとき、「恐れることはない。今から後、あなたは人間を取る漁師になる」という、主の恵みの働きに招き入れられていきます。またそれまで周囲の人たちに怒りと憎しみを向けて生きて来たザアカイは、主イエスが自分のことを覚えて訪ねてくださった喜びと感謝を、周りの人々に具体的にあらわす生き方に導かれました。それまで孤独に生きて来たザアカイに「横窓」が開けられ、彼は隣人の間で「新しい歌」を歌って歩む者に変えられたのです。

また詩編 98 編は「歌え！」という力強い命令形で始まっています。この呼びかけを受けながら、「ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」（マタイ 5・15）という主イエスの御言葉を想いました。今から約 20 年前、佐々木和之さんと一緒に初めてルワンダを訪れた時、夜の宿舎のベランダで祈り会をした時のこと。まわりの山々の中腹に点在する家々の小さな灯りに心があたたくされました。「この暗闇の中、あそこに生きている人がいる」。山の中腹に住む人の小さな灯りが旅人の心を照らし励ましてくれたのです。同じように私たち一人ひとりが主イエスから与えられた「新しい歌」を歌いながら信仰の火を灯らせていく時、それがどんなに小さな灯だとしても、周りの人たちの心を照らし、励ましを届ける灯りとされていくのです。「一人ひとりが主イエスから受けた新しい賛美を、礼拝堂の中にとどめることなく、この世界のただ中に出かけて歌っていこう！」。この力強い招きのもとに、今週も出かけていきましょう。